

## 投稿規定

- (1) 論文の内容は、日本を含む東アジアの領域を中心としつつ、他地域も含めたグローバルな文学・歴史・思想・民俗・宗教・芸術・政治・経済・法律・社会等に関するものとなります。
- (2) 投稿資格は、本学の専任及び非常勤教員・特命教授・名誉教授・客員教授・研究員・客員研究員・助手（非常勤）、研究所の企画・活動に参加した研究者、並びに編集委員会が認められた者となります。
- (3) 原稿の枚数は、四〇〇字詰め原稿用紙に換算して六〇枚前後とします。縦書き、横書きは問いません。（掲載が決定してから二週間以内に印刷用原稿を電子媒体で提出することを原則とします。）
- (4) 投稿された原稿は、編集委員会が最終的な採否の決定をします。
- (5) 執筆者校正は初校のみとします。なお、校正段階での大幅な修正はできませんので、完全原稿で提出してください。（大幅な修正があつた場合は、応分の費用を負担願うこととなります。）
- (6) 各執筆者に抜き刷りを五〇部及び本誌五部を贈呈します。なお、抜き刷り増刷は、実費でいたしますので、事前に申し込みください。
- (7) 本誌に発表されたものを転載する場合は、予め運営委員会にご一報の上、出版物の一部東アジア学術総合研究所にご寄贈下さい。（『年次別論文集』への掲載を除く。）
- (8) 本誌に掲載された全ての論文等については、原稿を電子化媒体によって複製、公開し、公衆に送信することができます。ものとします。
- (9) 執筆要領の詳細については、研究所までお問合せください。

## 編集後記

『東アジア学術総合研究所集刊』第54集をお届けする。二〇二三年は、新型コロナウイルス感染症が五類感染症に移行し、国際的な人的交流が数年ぶりに活発になった一年であった。一方で、二〇二二年のロシアのウクライナ侵攻に続き、パレスチナのガザ地区を支配するハマスとイスラエルの武力紛争が勃発するなど、国際情勢は混迷を深めている。学内に目を転じると、本学の信頼を揺るがしかねない研究に関する不正行為の疑惑が持ち上がり、研究所の運営も暗礁に乗り上げる危機にあったが、関係各位の努力により活動を継続することができた。

今年度の主な活動を報告する。まずは、日本漢学研究中心・陽明学研究中心による二つのシンポジウムを開催し、オンライン参加を含め多くの方々にご参加いただいた。次に、新規の共同研究として、国際政治経済学部の菊地宏樹講師が代表を務めるプロジェクトが採択された。また、この『集刊』には、二編の研究論文、一編の研究ノート、二編の資料紹介が掲載されている。海外交流は未だ延期されているが、次年度以降に再開されることを期待する。

これまでは主に研究所を外から眺める立場にあったが、突如として所長に就任することになった。その職責を十分果たせたのか定かではないが、この機会に現在の所感を述べる。研究所が漢学塾・二松学舎設立以来受け継がれてきた漢学・東洋学の発展に貢献し、これらの分野が本学のアイデンティティの中核であることに疑いはない。しかし今後は、人文科学に限らない他分野との交流や本学の知的・文化的資産を世間一般に広く認知させる努力が必要だろう。この点について、例えば本学の舎長であった渡沢栄一を分野横断的に研究するなど、江戸時代の商家経営を現代経営学の視点から分析することを試みる菊地講師の上記のプロジェクトのように、複数の分野が協働しなければ解明することが難しい問題を探究する方法が考えられる。そのためには、社会科学研究センターのような研究拠点を研究所内に設置し、他分野との連携を強化する体制を構築する必要があるだろう。

（岩田幸訓）